がん哲学外来市民学会 ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People

第9号
2016年9月28日
発行者

がん哲学外来市民学会
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3
がん哲学外来研修センター
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389
E-mail:shimin@gantetsugaku.org
http://www.shimingakkai.org/

がん哲学外来市民学会 第5回大会を終えて

石巻赤十字病院長
大会長　金田　巌

7月9日に「第6回がん哲学外来コーディネーター養成講座」を、そして10日に「がん哲学外来市民学会第5回大会」のお手伝いをさせて頂きました。

今回の経験を通じてあらためて「がん」は自然科学の対象でエビデンスが重要である一方、「がん患者」はその存在そのもの、周囲の人々、時間・空間などすべてを含めて人文科学や社会科学の対象で narrative が重要であることを痛感しました。そういう意味で、「がん哲学外来」と命名された樋野先生の慧眼に改めて感服しました。

ところで、「がん」は「死」に直結するものではないにしろ、「死の意識」を常に身に纏っております。16世紀の哲学者モンテーニュは「エセー」で「哲学することは死に方を学ぶこと」と定義づけています。

当時は、「異常な死」とは「老衰による自然死」であり、感染症を中心とする病気や事故・戦争などによる「思いがけず急にもたらされる死」が「通常の死」であり、現在の「がん患者」が死を身近に感じるよりも、当時の人は死を常に意識しながら生きていたと言えます。

モンテーニュは「命を失うことが不幸ではないのだと理解した者にとっては、生きることに何の不幸もない。死を学ぶことにより我々はあらゆる隷属や束縛から解放され自由になれるのである」と述べています。

しかし、「がん患者」に限らず我々にとって、〝死に方を学ぶこと〟は容易でなく、死を意識した時に「人生の意味」を見いだせなくなることがあります。このような時に私は、フランクルの「夜と霧」の中の、「我々が人生の意味を問うのではなく、我々自身が問われたものとして体験されるのである。人生は我々に毎日毎時問いを提出し、我々はその問いに詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならないのである。人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである」を噛み締めるようにしています。

フランクルの言葉はラインホルド・ニーバーの「The serenity prayer」と同様に、我々が常に「自分の課題」を解決すべく毎日を生きなければならないことを教えてくれます。

最後に「The serenity prayer（ニーバーの祈り）」の一部を引用し、筆を擱かせていただきます。

神よ
変えることの
できるものについて
それを変えるだけの
勇気をわれらに与えたまえ。
変えることの
できないものについては
それを受け入れるだけの
冷静さを与えたまえ。
そして
変えることのできるものと
変えることのできないものとを
識別する知恵を与えたまえ。

ラインホルド・ニーバー
（大木英夫　訳）

「奈良少年刑務所詩集より」　朗読：青木裕子×チェンバロ：小澤章代

金田巌大会長の挨拶：石巻赤十字病院災害医療研修センター

講演
―花一輪 咲けばいい―

曹洞宗通大寺住職
金田 諦應

平成23年3月11日午後2時46分大震災発生。大津波は多くの命と財産、そして思い出までも奪っていく。そこには生と死の狭間で苦悩する人々が残された。

生とは！死とは！答えのでない問いが突きつけられる。生き残ったことには必ず意味がある、そう言い続け、共にその意味を考えながら歩む覚悟を決める。

カフェデモンクの使命。それは破壊され、凍り付いた時間と空間を再びつなぎ合わせ、共に未来への物語を紡いでいくこと。

瓦礫の中にほっとする空間を作る。そこに心を動かす様々な仕掛けを置く。人は位牌の前で命の繋がりを語り、お地蔵様の前で奥底にこびりついた感情を吐き出す。そして未来への物語が少しずつ動き出す。

夫を失った女性。津波は、避難誘導している夫を海の底へと引きずり込んだ。一緒にお地蔵様を作る。メガネをかけ、微笑んでいる夫のお地蔵様に向かい、心の奥底から叫ぶ。「あんたはいつも人のことばかり考えている、私のこともすこしは考えて！」人目をはばからず泣き出した。今まで心の奥底に閉じこめていた想いが吐き出された瞬間だ。「人知れず泣く事」と、「人前で泣く事」とは大きな違いがある。彼女の悲しみの物語は、私達の物語へと繋がり、背負っている悲しみの重さはほんの少しだけど軽くなった。

岬の小さな仮設住宅の小学生。カフェの間、テレビゲームに夢中になっていた。ある日、ゲームの手を止めて突然話し出す。

「おれ、考えてることあるんだ」「なんだ、お前も考えることあるんか」「うん。おれさ、父ちゃんの後継いで漁師になる。だって都会は奪われるだけだけど、海は沢山のモノをタダで与えてくれる。だからおれ、漁師になる」。窒息するくらいその子を抱きしめた。豊饒なる三陸の海は別名「太平洋銀行」。太平洋銀行は、時々貸し渋りはするけれど、決してデフォルトしないのだ。

父との折り合いが悪いままお別れしてしまった事に悩む女性。三年後の春。潮を被り、花は咲かないと諦めていた父の大切な花壇に一輪の花が咲く。それを見ながら、「私ここで父と一緒に生きていける」、そう確信したという。一輪の花が未来への物語を動かしたのだ。

カフェデモンクの役割は「風」かもしれない。風はどこからともなく吹き、花一輪を咲かせ人知れず去っていく。そして人々は風の存在を忘れてしまう。「花一輪咲けばいい」…、それでいいのだ。

「生と死に寄り添う」
～臨床宗教師の視点から～

東北大学文学研究科
実践宗教学寄附講座
谷山 洋三

「臨床宗教師」は、公共空間で主にスピリチュアルケア、宗教的ケアを提供する宗教者を指します。

東日本大震災後に宗教者による被災者支援活動が注目されましたが、その流れを受けて、2012年4月から、東北大学に実践宗教学寄附講座が開設され、「日本版チャプレン」として臨床宗教師の養成が始まりました。

2016年7月までに東北大、龍谷大、種智院大、高野山大を合わせて180名以上が研修を修了し、全国各地で活躍しています。臨床宗教師のケア対象者は、特定の信仰を持たない人が大半です。そのため布教は行わず、宗教の枠を超えた宗教協力を前提として活動します。倫理綱領と倫理ガイドラインもあります。

臨床宗教師が提供するのは主にスピリチュアルケアと宗教的ケアです。両ケアの共通領域には「祈り」など宗教的資源の活用というアプローチもあります（詳しくは拙著『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア』中外医学社をご参照ください）。

がん哲学外来コーディネーターは、スピリチュアルケアの場を提供することだと思いますが、場合によっては臨床宗教師とのコラボや、寺社教会での開催という可能性もあると思います。

スピリチュアルケアにおいて大切なことは、「多様な価値観を認めること」とその基礎となる「自分自身をみつめること」です。自分の価値観・世界観を理解しておかないと、他者の価値観を認めることも難しいでしょう。

例えば死生観は、比較的容易に確認することができます。「死は怖いか？怖くないか？」「先に亡くなった人はどうなったと思うか？」「自分は死んだらどうなると思うか？」を仲間と話し合ってみてください。死生観は変化するので確立する必要はありません。今の自分の死生観を確認するだけです。

スピリチュアルケアの実践においては、私たちは無力を味わうことになります。「どうしていいかわからない」、つまり答えのない問いに対応するので、無力を感じるのはむしろ当たり前のことです。

自分の無力を受容できると、逃げずにその場にとどまることができます。そして、相手から大切な言葉を「引き出す」のではなく、こぼれ落ちてきた大切な言葉（ネガティブな内容を含めて）を「拾う」という態度で接するように心がけてください。

みなさんが愛を伴う行動を心がけていれば、スピリチュアルケアの場を作り出すことができます。私はそのことを祈りつつ、応援したいと思います。

講演
「二度のがんを経験して」

秋田テレビ 常務取締役
石塚　真人

私は32歳の時「早期胃がん」を宣告されました。当時がんは「不治の病＝死」を予感させ告知されることは稀でした。フジテレビの逸見さんがスキルス性の胃がんであっという間に亡くなった頃です。

結果的に私の場合は「早期の扁平上皮がん」で、手術により完治し転移もありませんでした。不幸中の幸いでしたが、その後長年にわたり「逆流性食道炎」に苦しめられることになります。寝ていると消化液が食道を直撃し痛くて眠るどころではありません。慢性的な不眠と、「誤嚥」による「肺炎」にも悩まされました。

最初の手術から20年、今度はその食道にがんが見つかりました。「がんは上にあがる」と思いこみ、食道・喉頭の検査を年2回行っていました。その意味では「来るものが来たな」という心境でした。秋田大学病院での見立ては「気になるリンパ節が2箇所あり転移の可能性を否定できない。リンパ節郭清で声帯の付近にも触るので声を失う可能性もある」…、声を商売とするアナウンサーにとって最悪ともいえる告知を受けました。

この時病床を見舞ってくれた尊敬するK先生から「徹底的に思いぬくことも一案」という示唆を頂きました。手術への恐怖、家族のこと、仕事のこと…、徹底的に悩み考え抜くことでがんと闘い前に進む勇気が湧いてきました。がんを運命として受け入れ、医師を信じて前向きに闘うことを覚悟したのです。

二人に一人ががんになる時代。怖い病気に変わりありませんが、早期に見つけられれば克服可能な時代になってきました。戦い方、向き合い方も選択肢が増えてきました。痛みのコントロールだけをして自然に任せる、という人もいます。私の仲人がそうでした。亡くなる数週間前、仲間とともにゴルフの海外遠征に出かけ、帰国後まもなく病床につき最期は自宅で安らかな死を迎えました。

あれから十年余り。再発もなくごく普通の生活ができています。何よりうれしいのは、逆流性食道炎が二度目の手術で解消されたことです。小腸再建手術により腸の逆流防止弁が、残った食道に吻合されたのです。これにより私のＱＯＬは格段に改善されました。捨てる神あれば拾う神あり、です

講演
「魂の叫びに向き合う」

河北新報社 報道部次長
松田　博英

東日本大震災から五年半が過ぎた。震災は数多くの命を突然に奪い、関連死も相次いだ。遺族は深い悲しみにさらされた。

死とどう向き合うかは科学的な捉え方だけでは論じきれない。「なぜこんな理不尽な目に遭うのか」といった思いは、魂から発する痛みや叫びを伴うのではないか。身近な人、周りの人はどう寄り添えばいいのだろう―。

こうした問題意識から、河北新報社報道部は２０１５年１～７月に「挽歌の宛先　祈りと震災」と題する長期連載に取り組んだ。

河北新報社は、東日本大震災で太平洋沿岸の街や集落があちこちで壊滅的に被災した東北を取材エリアとする。再生を期し腰を据えた震災報道をしていく上で、「祈りと震災」という主題は避けて通れない重要テーマであるという決意で取材と記事執筆に臨んだ。

挽歌は死者を悼む歌。被災地にはさまざまな宛先の挽歌がこだまする。取材班は挽歌にひたすら耳を澄ませた。悲嘆の中にある遺族や被災者の声を聞いた。未曾有の大災害に直面し自らも大切な人を失うなどした宗教者が何を思い、どう行動したかを丹念に追った。

悲しみは時がたてば癒えるというものではない。人は死んだらそれで終わりではなく、魂はその後も身近な人のそばにどうやらいるらしい。残された人は亡き人の存在を感じながら、悲しみと共に亡き人と生きていく…。連載を通してこのようなことをひしひしと感じている。

挽歌の宛先は12部構成で展開した。その第８部（５回続き）は「臨床宗教師はいま」というタイトルで、被災者や終末期患者らのそばにいて生老病死の深淵で模索を続ける臨床宗教師について考えた。信心の立場を超えて生者と苦しみを共にする臨床宗教師は、東日本大震災をきっかけに東北の被災地で活動を始めた。

「自らの役割問い続け／体の痛みは治せないでも心の声を聴く」「命の行方 照らす灯に／医療と宗教 橋渡しの実現後進に託す」「いたわり 垣根を超え／信仰は違えど、皆救いを求めている」「掛ける言葉 探す日々／あの日、檀家のそばにいられなかった」「人生の意味 紡ぎ合う／ホスピスの僧侶 最期までずっとそばに」

第８部の各回に付けたこれらの見出しを見渡すと、臨床宗教師が開こうとする道は日本版のスピリチュアルケアだという気があらためてする。魂から発する痛みや叫びを聴き人生の意味を紡ぎ合う先に、前を向く力を取り戻す扉がきっと見えてくる。

第6回養成講座を終えて

がん哲学外来市民学会
副代表
安藤　潔

第6回養成講座は2016年7月9日に石巻市で開催されました。今回も昨年12月の参加者募集開始からわずか2週間で満席となり、直前のキャンセル待ちを含めて100名の参加者で行われました。

石巻の実行委員会が準備されたプログラムは簡潔かつ充実した内容でした。昨年の金沢講座の実行委員長を務められた西村元一先生が鼎談「患者と医療者と宗教者の協働」にサプライズ参加され、元気なお姿を見せていただいたことは、「がん哲学外来市民学会」のあるべき姿を具現化したものとして大きな歓びでした。

また、今回は「カフェデモンク」をはじめとして臨床宗教師の実際の活動に多く触れられたことが新しい学びでした。グループワークはいずれのグループでも活発な意見交換が行われ、参加者の言葉を引き出したグループファシリテーターの力量も充実してきたことが感じられました。

6回の歴史を経て、「ガイダンス」「講演」「対談あるいはワークショップ」「グループワークと発表会」という養成講座プログラムの枠組みができあがってきました。

しかし、開催される場所、参加されるメンバーによって、毎回が新鮮です。来年の神戸でも今回の修了者と一緒に、新しい参加者をお迎えすることが楽しみです。

第6回がん哲学外来コーディネーター養成講座「グループワーク」

1班　平林　かおる（栃木）

1班は初参加者が半分、認定コーディネーターの有資格者、認定間際、もう少しで認定者が半分で、ベテラン参加者が初参加者をファシリテートしながら進行しました。

「こころに寄り添う」をテーマに話し合われた今回の討論は「こころとは何?」の問いかけから始まり、初めは宗教の問題に触れ、終末期の医療現場において宗教者（臨床宗教師）を導入することも必要なのではないかという意見が出る一方で、病院の中での宗教活動は宗教＝葬式＝死を連想し一般的にはまだ歓迎されないとの意見もありました。

日本人は無宗教であると言われますが、「お天道様」「お祭り」「初詣」「仏様」など生活の中に宗教的習慣が溶け込んでいるため普段は意識していないだけで各々信じているもの、大切にしていることがあり、その人の思っていること欲していることに思いを馳せることが「こころに寄り添う」ために重要とのことでした。

安心と安全が得られ、力が抜けるところ、居心地の良い居場所、支えてくれる人がいる場所を求めてカフェに来られるのであれば、相手が欲することに寄り添う場所がカフェとの結論でした。

震災後、被災地を巡り被災者の「心」に向き合う活動をされてきた傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」の金田住職はカフェを作った理由として「震災で傷ついた被災者がホッとする場所を作ること、普段はなかなか言えない心の内を吐き出し傾聴する」と。これはまさにがん哲学外来・メディカルカフェがしようとしていることと同じではないかと。

「震災」を「がん」に置き換えても通じる理念を確認できたことに、1班の討論を重ね、震災の地での大きな学びとなりました。

夕食後の発表に向けて模造紙にまとめる。班員の気持ちがひとつになる。

2班　本田　雅志（福岡）

私たち2班は、医師などの医療関係者からサバイバー、カフェ運営者、大学で教育を行っている方まで様々なメンバーでグループワークを行いました。各メンバーが「心に寄り添う」についてそれぞれ思うことを語り合う形でのグループワークになりました。

2班では、寄り添い方について話すことが多く、「ただ話を聴いてもらうだけでいい」「患者側も医療者に寄り添ってみる」「言葉の処方箋・一言のプレゼント」「相手が求めていることに気付ける人間力」「男女の価値観の違い」というキーワードが上がりました。その中でも、「男女の価値観の違い」については、カフェ運営をされている方などから、参加者に男性が少ないこと、参加されていても他の参加者との触れ合いが少なく一人ポツンとなってしまっている現状を聞くことができました。

それに対して医師や教育関係者からは、男性は女性とは脳の構造が違うことや仕事中心の人生を送っていたために、他の環境に馴染むことに苦労するのではといった話があり、また別のカフェ運営者の方からは「自分の趣味を語る場」などといった目的を設定したカフェを作ることで男性も話しやすい場を作ることができたという体験談をご披露いただきました。

寄り添うことに特別な資格などは必要ではありませんが、男女の違いなどの価値観の違いを考慮した寄り添い方を考えることや相手が求めていることに気付ける人間力などは重要であることを再認識したグループワークとなりました。

メンバーそれぞれが互いを尊重しつつ、心の寄り添いについて皆の想いを笑顔で共有することができたと思います。

グループワーク会場では、10班に分かれて話し合いを深めました（夕食を挟んで約3時間の設定）。

講座のテーマは「こころに寄り添う」。「人間力って大事よね」と話が弾んだ2班。

3班　土屋 千雅子（東京）

九州宮崎から岩手まで10名の参加者、それにファシリテーターの2名を加えて12名でした。

今回は医師、臨床心理士、看護師、薬剤師、ご遺族、サバイバー、主婦の方々でした。自己紹介の後は、皆さんそれぞれの日々の関わりの中で、今回のテーマをご自分で実践されている方々という事がお互いに理解しあえて話が進みました。

「寄り添う」という言葉が上から目線であり、しっくり身体に入って来ないと言う方がおられましたが、お話を伺っているとすでに、完璧に「心に寄り添う」という事を実践されていらっしゃいました。

最近は、いろいろな所で「寄り添う」という言葉がみられ、わざわざ言葉にしなくてもよいのではないかというご意見でした。「心」が重要であるという、まさに哲学的な話になりました。石巻まで足を運び、ご縁があって、同じ時を共に「心に寄り添う」というテーマに向かって同じ方向を見ながら話し合う、素敵な時間を共有できたと思います。

寄り添うために、ざっくばらんな話のできる場、気軽に話せる場が必要であり、それが「がん哲学外来メディカルカフェ」であり、会話をする場というより心をかわす対話の出来る場所である必要があると思います。

集まった方々は、寄り添う心を持って、言葉を超えて二重三重になって相手の心にしみていくような人柄が、がん哲学外来コーディネーターに求められている事と理解を深めました。そのようなコーディネーターのいる「がん哲学外来メディカルカフェ」がそこかしこにあるといいと思います。

グループ発表も力強く（3班）。

4班　小林 真弓（埼玉）

がん哲学外来、メディカルカフェに携わっている人もいない人も、患者本人も、家族も、医療関係者もいろいろな立場の方々が参加。それぞれ熱い想いで石巻に集まり、12人が一つのテーブルを囲んで、「こころに寄りそう」について話しあいました。

それぞれの自己紹介がおわると、「こころに寄り添うってどんな事?」「こころに寄り添ってもらったと感じた時ってどんな時?」「こころに寄り添えたと感じた時はどんな時だった?」と質問疑問が飛び交う中、笑いあり、目頭が熱くなることもあり、全員が一つのテーマにそって、語りあいました。

私達は、患者本人の気持ちと、家族の気持ちをそれぞれの立場になって考えてみました。医療者側等で日常仕事をしていても、家族としてその場を迎えると仕事上と同じようにはいかない等の話がでたり、患者は気持ちや体調に波があるのでそれをわかって欲しい、正論よりも配慮が大事。患者は病気になる前と同じ様に接してほしいと思っている。こころに寄り添うとは、相手の中に答えがある。相手の大切にしているものを尊重して、「ここにわたしがいるよ」と一緒にお茶を飲んでいるようなイメージで、等の意見がでました。

食事をはさみ、和やかに話が進む中、模造紙を広げて想いをマジックで描いていきました。私達が寄り添うイメージは、

「縁側でひなたぼっこしながら、おじいさんとおばあさんが、お茶を飲んでる。傍らにはワンちゃんがゆったりとながめている。では、私達はチーム縁側ね」と話し、絵の得意なメンバーがみんなの言葉をしっかりと絵にしてくれました。

チーム縁側は、一枚の模造紙に全員の「こころに寄り添う」想いを描き、ステージで発表しグループワークを終えました。

終了後は、模造紙の前で全員でパチリ。素敵な笑顔の写真にチーム縁側の世界が広がっていました。チーム縁側の皆さんにご縁を頂き実りのある石巻になりました。

発表は「日向ぼっこをしている縁側」のイメージで。「正論よりも配慮」です。

5班　車屋 知美（福井）

5班は、多様な職種や立場、養成講座への参加回数もまちまちのメンバー12名でした。ワークの初めに今回の養成講座の講演や対談などを通しての思いや普段の活動の中での思いをそれぞれ話しましたが、一人の方のご家族をがんで亡くされ看取りをされた体験談をきっかけに、看取りに焦点を当てて話が進み、「よい看取りを希望（のぞむ）こころに寄り添うには?」をテーマに「そのためにはなにが必要か?」を話し合うことになりました。

・がん患者さんもそのご家族も、そこに関わる方々も「情報」を必要としている。「情報」を得られるのがメディカルカフェやがん哲学外来なのではないか。

・Face to face（個人対個人）で話ができるところ、地域によってはカフェに参加するのも敷居が高く感じる方もいるので、例えば、温泉ツアーと称してその中でカフェをするとか、カフェにオプション（読書会、ヨガ、タオル帽子作り）を設けるのも良いのではないか。

・若い世代に正確な情報を伝えていくための教育も必要。学校教育（小学校～大学）の段階で取り入れていくのも一つの方法だと思われる。

・これらのような活動のプラットフォームとして『各地のメディカルカフェやがん哲学外来』があり、そこを支えるのは『がん哲学外来市民学会』である。

話し合った内容を模造紙にまとめるうちに「メンバーそれぞれに勝ち虫とんぼを一匹描こう!」となりました。それぞれの個性が表れているとんぼには「グループのメンバー各々がこれからも前に進んで活動できるように…」という願いがこめられているように感じました。

“勝ち虫とんぼ”を描こう。「前に進んで活動できますように」との願いをこめて。

6班　宮地 里加子（宮崎）

飛行機が苦手な私はJRを利用し石巻に向かいました。仙台駅のホームでは「出来る事なら大の字になりたい」という言葉が脳裏を過り、「いやいや、明日になれば昨年の9班の皆さんに会える！アランドロン樋野先生にもお会いできる！」と石巻行きの電車に飛び乗りました。

今回も素晴らしいメンバーに巡り会え、医療従事者、ご主人を支えて居られる方、大切なご主人様を亡くされた遺族の方、カフェ関係者等、多彩なメンバーでのグループワークが始まりました。

途中の夕食もそっちのけで熱が入り全てを出し合っての意見交換です。ハート（心）に両手を包み込むイメージで様々な思いを持った方々が苦悩や迷い溜め込んだ思いを吐き出し、心の在り方、視点が少し変わる事で一日一日が今までと違った時間になるのではないかと確信した瞬間でした。

同時に聴き手の資質、発する言動、行動は大変重みの有る事、他人の人生を左右するであろう大役と責任感を心に刻み身の引き締まる思いでした。女性より男性のカフェの参加が少ないとの事。この課題を持ち帰り「何故？」と自問自答しています。何故？を問うと問題解決のヒントが隠れている事があるからです。

がん哲学とは本当に深い。問えども問えども答えがない。そして又、全ての場面で形を代えては置き換える事が出来る哲学である。まるで、がん細胞のように…。

7班　高野 みどり（千葉）

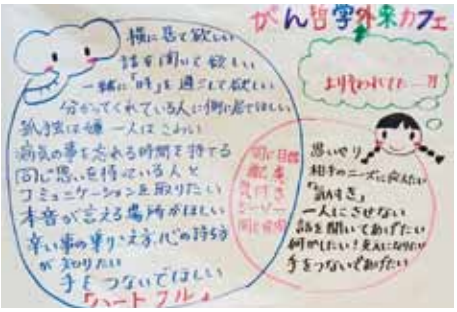
7班は、初めて参加された方、毎年参加されている方、既にコーディネーターとしてメディカルカフェを運営している方、また近日中にがん哲学外来を開設する予定の方々12名で構成されました。

更に、昨年のがん哲学外来市民学会実行委員長で現在、金沢赤十字病院副院長の西村元一先生も加わってくださいました。先生は、昨年は病床からビデオ参加されて閉会の御挨拶をしてくださり、私たちのグループに加わってくださったことは、個人的に大きな感動でした。

このようなメンバーでグループワークは開始されました。自己紹介の後に、「寄り添うこととは、どんなことか」を、夕食時間も惜しんで話し合われました。そして、最後には話し合った内容を一枚の模造紙に表現して発表の準備に入りました。

「寄り添う」をテーマにしたら、やはり、樋野先生が話して下さる時に登場する「大きな象さんと小さな子どもが寄り添う」、あの光景が思い出されます。私達の思いを一枚の中に表現しました。

象さんは、がん哲学外来に参加される方々の思い、これは自らが参加し始めた時の思いも含まれての気持ちでした。そして、可愛い子どもは私達コーディネーターの思いや願いを表現しました。そして、両者（象さん&子ども）が重なった部分は、参加するすべて人々の「立ち位置」を表現しました。そして、最終的にがん哲学外来コーデネーターは、「寄り添っていると思っていたら、寄り添われてた…」と越冬隊長秋山美奈子さんの一言に集約されました。



大きな象さん、小さな女の子。「寄り添う」イメージを描きました。

8班　棚瀬 裕文（東京）

私は今回5回目の参加で実行委員・ファシリテーターとしての参加です。グループは10名の参加者とファシリテーターとサブ（4回目）の12人です。参加者の内1回目は5人、2回目2人、3回目2人、4回目1人、男性は私の他1人、患者自身、遺族、医療関係者という背景でした。実際にお会いして自己紹介をお聞きした時点では、グループをまとめるのに失敗した2回目のファシリテーションがよみがえってきました。2回目以上の参加者の方は経験があり、「がん哲学スピリット」で初参加の方々を「偉大なるお節介」で導いて下さると思っていましたが、（それが実際にがん哲学外来カフェの現場での実践につながるのですが）、コーディネーターを目指すにしては発表者・記録者・ニュースレター執筆担当者がすんなりと決まりませんでした。その上、今回は、グループワークの時間が短いので不安になりました。

笑顔で寄り添っている7班のメンバー全員集合!

しかし、勇気ある方が発表を二人でするならと引き受けて下さってから流れが変わり、一時間ほどで大筋がまとまり模造紙に書けるまでになりました。実際に模造紙に書き出すと次々にアイデアが出てきて、次のようにまとまりました。ほとんど視覚に訴えるデザインです。

『あなたは一人じゃないよ』と上段に、『一本の糸でつながった者同志』と下段に大きな文字で、真ん中に「患者」をハグして包み込む家族、左右に「医療・福祉関係者」と「がん哲学外来カフェ」の顔をそれぞれ描きました。家族は無言でもやさしさの心、医療者は配慮と信頼の心、カフェでは笑顔Smileの希望の心を顔の表情にそれぞれの特徴を表現しました。

翌日、全員で記念写真を撮り、よい思い出が出来ました。

配慮と信頼、笑顔スマイルの希望の心を発表会の土台に据えて（8グループの皆さん）。

9班　村上 利枝（神奈川）

今大会実行委員長鈴木先生のお言葉にもあるように、このがん哲学外来コーディネーター養成講座が、単に知識を得るための時間ではなく、受講者自らが考え、語り、時に反論し、そして納得できるような能動的な有意義なカリキュラムになるには、ファシリテーターとしてどう対応したら良いのかと私は一抹の不安を抱えながら当日を迎えました。

9班は患者さん、医師、医療関係者、ピアサポーター、終活関係NPO関係者など。また性別・受講回数・立場・居住地等、偏らない配慮の下で構成されたメンバーでした。

まず各人自己紹介をし、一つ目の難関の発表者・書記の役割決めでしたが、私の心配をよそにすぐ決まり、いよいよグループワークの本題、テーマは、「心に寄り添う」です。がん哲学外来の基本理念に基づいた心に寄り添うとは「何か」からグループ討議が始まりました。

心に寄り添うには

①配慮する（30m離れた所から見守る・相手のペースに合わせる）

②負担にならない。（そばにいるだけで価値のある存在）

これら二つ言葉は重要と意見が一致しました。この二大キーワードを仙台市の七夕祭りに模倣し、短冊を用いた七夕飾りで表現、発表しました。

また自己紹介の時、前の人の紹介の言葉（仕事・出身地・趣味など）をたまたま次の方が引きついだ自己紹介となったので、別名「繋がりグループとしよう」と声があがりました。この時間が、養成講座の学びとともにお互いにとっての大切な時間となり、次の日の大会への貴重な繋がりとなりました。

班員は患者、医師、医療関係者、NPO関係者、ピアサポーターなど（9班）。

10班　福原 幸子（千葉）

10班は東北から九州までの10県から、「がん哲学」に対する情熱を抱えて石巻に集合した同志たちでした。

討議では、弱った心に寄り添う具体的な体験を通し、良かった点と苦しかった点について語り合いました。言葉は諸刃の剣で助けにも癒しにもなる反面、誤解を生む元にもなります。

気がついたら温かい手が、黙って背中を支えてくれていた。優しい言葉でも、立場が変われば上から目線に苦しみます。辛い時にはその事を伝える勇気も必要です。相手の必要を知る為には、先ず自分自身の正直な心に向き合う事が求められます。

お父様のがん闘病中に何も話せず見送った事を悔やんで居られた方が、後年ご自分の入院中、見舞いに来られたご主人は何も話さず傍で読書をして居ました。心身共に辛い中、黙って傍に居てくれる事がどんなに嬉しいかを実感されました。その時に亡くなったお父様を思い出し、黙って傍に居ただけと思っていた事が決して無駄でなかったと、寄り添うことの本質に触れた不思議な経験をされたそうです。

発表では、宮沢賢治にちなんで「銀河 Café」と題し、七夕に祈りを込めて「安心安全な場を提供する」為に愛と誠意を土台に据えました。カフェが癒しの場であることを願い、真心を尽くして対応させて頂くためです。全国の同志と共に大切な学びに参加出来た事に感謝します。

「銀河Café」にようこそ!!10グループは七夕に祈りを込めて発表しました。

樋野先生による特別講演「がん哲学外来へようこそ～あなたはそこにいるだけで価値ある存在～」

樋野代表から「がん哲学外来市民学会認定コーディネーター」として認定証が授与されました。

この日の石巻日赤会場への出張サービス「カフェ・デ・モンク」は大入り満員でした。

総合司会を終えて

がん哲学外来市民学会
副代表
北澤 彰浩

今回のコーディネーター養成講座は基調講演を「生と死に寄り添う～臨床宗教師の視点から～」のタイトルで東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄付講座准教授の谷山洋三先生に、対談を「医療者と宗教者の協働」のタイトルで司会を福井県済生会病院外科主任部長の宗本義則先生にお願いし基調講演の谷山洋三先生と石巻赤十字病院副院長鈴木聡先生に、最後のワークショップをテーマ「こころに寄り添う」で行いました。

どれも本当に充実した内容になりました。特筆すべきは昨年の金沢大会の際に実行委員長でありながら突然のがん発症にて参加出来なかった金沢日赤副院長の西村元一先生がサプライズで対談に御登壇くださり「治療する側から治療される側」になって初めて気付いたこと理解できたことを含め「医療者と宗教者の協働」の意義や大切さを語ってくださいました。コーディネーターの存在の重要性を改めて認識も出来ました。

来年は神戸でまた皆様とご一緒に学びたいと思います。

対談の座長をして

福井県済生会病院
外科主任部長
宗本　義則

養成講座の実行委員長である鈴木聡先生の発案で、医療者・宗教者の協働で何かが足りないとお話しがあり、サプライズで金沢日赤病院の副院長の西村元一先生に対談に加わってもらいました。

西村先生は医療者でもありながら患者でもあり多方面の協働についてお話が聞けました。我々は宗教者にはなじみが薄いが谷山洋三先生の持ち前の明るい性格で被災地での活動の様子、臨床宗教師の必要性を理解させてもらいました。

鈴木先生からは大震災を通してこころに寄り添うことの意義を教えてもらい、西村先生からは患者の真の声が医療者に届いていないことを指摘されました。

谷山先生とは高校の先輩後輩の仲、鈴木先生とは同じ年で同じ外科医、西村先生とは大学の一年先輩で北陸で同じ大腸外科医…、運命的な繋がりさえ感じた対談となりました。意義のあるそしてなかなか実現できないメンバーであり、この後のグループワークに大いにつながる内容になったことは言うまでもありません。

対談者：向かって左から西村元一、谷山洋三、鈴木聡の諸先生方。司会は宗本義則先生。

講座と大会を終えて

実行委員長
鈴木　聡
（石巻赤十字病院副院長）

7月9日の第6回がん哲学外来コーディネーター養成講座と、翌10日の市民学会第5回石巻大会には大勢の方々にご参加いただきました。

今回のコーディネーター養成講座は、受付開始からほどなくして定員になったと聞きました。皆様の熱意には全く圧倒されます。そのご期待に十分に応えられたかどうか…。

でも、あの東日本大震災で被災した石巻で「生と死」を語り合い、「がん」を語り合った濃度の濃い二日間でした。そこで皆様が思ったこと、考えたこと、感じたこと、それら大切にお持ちになってお帰りいただけたのならこれほど嬉しいことはありません。

私たちにとって、一年とちょっとの準備期間はそれこそ「あっ！」という間でした。しかし、忙しさの中にも充実するものがありました。それは講座と大会を終えた今もなお心の中に残っています。

皆様をお迎えした私たちが育てられたのです。このような機会を頂いたことに感謝しています。

第6回大会に向けて

神戸薬科大学
薬学臨床教育センター
大会長　沼田　千賀子

がん哲学外来市民学会第5回大会に参加し、石巻から次大会へ向けてのバトンを受け取りました。そのバトンに込められた思いを考えたとき、出てくる共通のキーワードは「震災」です。

神戸も21年前に阪神淡路大震災を経験し、多くの被災者に対する支援が行われました。街も復興しその面影を感じることも少なくなりましたが、自身の心の中にはまだ当時の悲しみや不安、やり場のない怒りが残っています。

自然の摂理とはいえ、この受け入れ難い状況を振り返って見るとき、がんの発病と震災には共通したものを感じます。それは「死」を身近に感じながらもそれに立ち向かい乗り越えて行った先に、本当の自分や役割を見出すからかもしれません。

第4回大会金沢でのテーマは「傾聴」、第5回石巻は「寄り添う」でした。そして第6回神戸では、さらに一歩進めて「役割を果たす」をメインテーマとして準備を進めて参ります。周囲の支えに感謝しながら、次に自分が社会へ果たせることは何があるのか、それを共に考え醸成させていく場にしたいと思います。

来年の養成講座と大会は、7月8日～9日。神戸でお待ちしています。

編集後記

ニュースレター編集人
星野　昭江

今回の石巻での「がん哲学外来第5回大会」ほど心待ちにしていた大会はなかった。あの未曾有の大災害を蒙った宮城県石巻市で開催されることの意義も無論のことだが、「再会」を願い続けてきた方がいらしたので…。

初日の養成講座、その対談が始まる檀上を見て驚く。西村元一先生がマイクを握っていた。「サプライズ出演、再会できた！」。昨年の7月12日、金沢大会で閉会の挨拶（ビデオ出演）をされた病衣の先生を思い出す。

翌日の大会では金田諦應住職が講演された。涙が止まらなかった。天災とは言え、訳が分からないうちに「死」を受け入れざるを得なかった魂の在りどころ…。それを探って探り得ないまま、後に遺された人々の苦しみと哀しみ。住職のお話を傾聴して「カフェデモンク」に来られた人たちの「言の葉」一つ一つを拾い上げて掌に掬い取ろうと心を傾けて下さった臨床宗教師の存在を心に刻んだ。

と、その時、傍らに懐しい人たちを感じたような気がした。カフェで逝った身近な人たちだった。そのひとりひとりが「心配しなくても大丈夫！」と微笑んでいた。